

日本のキリスト教禁制による不審船転送要請と
朝鮮の対清・対日関係
——イエズス会宣教師日本潜入事件とその余波——
木村可奈子

本稿では、日本側がどのような情報に基づいて、なぜ朝鮮との間に不審異国船の引渡し体制を築こうとしていたのか、日本から不審異国船の転送要請を受けた朝鮮が、対清・対日関係のうえでどのようにその要請に対処し、漂着船を処理したかを検証した。

キリスト教を禁止している日本は、イエズス会宣教師の潜入事件をきっかけに、不審船が朝鮮に漂着した場合、釜山の倭館に送って日本に転送してくれるように朝鮮に対して要請した。捕らえた宣教師の自白から、朝鮮方面からの宣教師の潜入の可能性を知り、警戒したためである。日本と友好関係を維持したい朝鮮側はその要請を受け入れ、不審な船があった場合倭館に送ると回答した。

当時明船がしばしば朝鮮に漂着したが、明清交替の最中であり、清朝に服属している朝鮮は、清との関係上明人を清に送らねばならなかった。しかし、清に送った場合、その明人が殺される可能性があった。明に日本の侵略から救ってもらった義理があるため明人を助けたい朝鮮は、1644年に明船が漂着すると、キリスト教徒の可能性があるという口実を用いて日本に送ることで、彼等を生還させようとした。日本側は朝鮮の対応に喜び、引き続き不審な漂着船があれば倭館に送るよう要請した。しかし、その次に明人が漂着した際は、清朝の勅使が朝鮮にやってきたため、清に隠して日本に転送することは不可能であった。そこで仁祖は勅使に処置を相談することにした。この際明人が清に投降したため、朝鮮側と勅使の間で実際には相談は行われなかったが、清側は明と日本の軍事協力を警戒しており、日本に送ることを許さなかった。

また朝鮮は、日本側の不審船転送要請や日本から得た明の乞師情報を清に伝え、日本の脅威を強調することで、清から要求されていた運米・船役の免除や、禁止されていた城の修築や兵の訓練を許可されるように図った。この目論見は当初上手く行っていたが、孝宗の即位に際し、日本の脅威を

理由とした軍備回復を清に譴責されてしまう。そのため、朝鮮は清の怒りを買うことを恐れ、明人が漂着した場合、一部の例外を除き清に送るようになった。しかし朝鮮内では清への反感は根強く、明人が漂着する度に、キリスト教徒だとして日本に引き渡すことが議論された。